

FUJIEDA ROTARY CLUB

藤枝ロータリークラブ会報

事務局：藤枝市青木1-9-16 TEL 054-647-2300 FAX 054-647-2040
例会：毎週水曜日 小杉苑 藤枝市青木2-2-48 TEL 054-641-3321



会長：松葉隆夫 副会長：石垣善康 幹事：増田國衛 副幹事：酒向謙次

第1826回



2009-2010年度 RIテーマ

ロータリーの未来は
アナタの手の中に

ジョン・ケリー

サルビア

写真提供：櫻井龍太君

<ソング>四つのテスト
<ソングリーダー> 大塚 高弘君

会長報告 松葉 隆夫君

市内の茶問屋 21 社が協力し地産地消を目的とし同一製茶（藤枝産）を使用し各々の会社で仕上げ火入技術を競い、一般消費者の方々に審査していただき順位をつけ、上位 10 社の者を配合して藤枝めぐみとして 10 月 24 日（国文祭）の日より売り出しをします。当日は審査員 20 名（消費者の方々）と関係者 30 名が集まり熱気に包まれ無事終る事ができました。

審査員の方々も真剣にやっていただきよかったです。この藤枝めぐみは全体で 5000 本位売り出されます。皆様も是非一度買って飲んでみてください。藤枝土産に最適です。

幹事報告 増田 國衛君

- R.I より「人類のために活動します」というタイトルの CD が届いております。
- 第 2620 地区直前ガバナー事務所より「事務所閉鎖のお知らせと報告書」が届いております。
- 第 2620 地区「ロータリーの友」地区委員より、「広報活動の実態、状況について意見、情報を出して頂きたい旨のお願い」が届いております。
- 藤枝子どもと本をつなぐ会より、「会通信 No.59」が届いております。

出席報告 大塚 高弘君

本日のホームクラブ出席者	前回の補正出席者
30 / 41 73.17%	34 / 41 82.93%

(1)欠席者（事前連絡とメイクアップをどうぞ）
鈴木廣君 玉木君 大長君 水野君

飯塚君 板倉君 落合君 鈴木舜君 仲田晃君
望月志君 柳原君

(2)メイクアップ者

大長 昭子君（藤枝南） 河井 宏文君（藤枝南）
後藤 功君（焼津南） 鈴木 廣利君（焼津南）

スマイルBOX 望月 晃君

- ありがとうございます。忘れていました。気をつけます。 玉木 潤一郎君
- 次年度の第 5 分区ガバナー補佐を務めさせて頂く事になりました。クラブの皆様にはご無理をお願いすることも多いかと思いますが何卒ご協力の程お願い申し上げます。 青島 克郎君
- 先般のゴルフ同好会のコンペで優勝させて頂きました。メンバーの皆さんに深く感謝しております。 鈴木 勝弘君

スマイル累計額 434,000円

外部卓話

「下りお茶壺道中」
藤栄製茶株式会社
会長 時田 鉦平様



既に広報等でご承知だと思いますが、「第 2 4 回国民文化祭しずおか 2009」が開催され、藤枝市でもいろんな催しを計画しています。今日は、その中で旧岡部町と共同で行う、「お茶壺道中」についてお話しします。まず、お茶壺道中とは何か。江戸時代初期に將軍家光は江戸城で飲むお茶を京

都から取り寄せていました。当時、お茶はお殿様だけの飲み物であり、京都にお茶を取りに行くことに大名行列と同じ権威を持たせた行列というわけです。

これは、正確な記録があまり残っておりませんが、たまたま藤枝東高校の先生のご先祖にあたる山寺甚左衛門が寛政6年1794年に京都から江戸城にお茶を届ける道中の責任者となり、この時の様子を日記に克明に記していました。この、前代未聞の記録をわれわれが読めるように編纂したものが本日紹介する内容です。

よく、「ずいずいずっころばしごまみそずい、茶壺に追われてとつぴんしゃ(ん)ぬけたらどこしよ……」と謡いました。この、「茶壺にとわれてどつぴんしゃん」というのは、道中が近づいてくると急いで家の中に隠れ戸を閉める行動を一般庶民が皮肉ったものです。このお茶は、1壺に5キン(約3kg)入れ3壺運びました。お殿様が1年で飲むお茶が9kgという訳です。

年が改まった寛政6年(寅)の5月12日、江戸を出発した「上りお茶壺道中」35名の一行は、中山道を上り碓氷峠をはじめ数々の峠道を越えて漸く醒ヶ井に着きました。当時のコースは中山道と東海道の2ルートがあり、この時は中山道から京都に向かっておりました。22日は守山へ泊まり、翌朝、守山を立ち、予定通り晝前に大津宿へ到着しました。大津本陣にて行列を引き継いだ山寺甚左衛門達大阪城方は、志賀(滋賀)越えの山道約200kmを歩き其の夜宇治へ到着、「將軍家茶壺」を無事「上林家」へ納入し上り道中を完了しました。

上林家管理のもとで「横井松柏」による新茶碾茶の「茶詰の儀式」を済ませた將軍家茶壺は、宇治出立が6月10日明け六つ(午前六時)と決められていました。当日、上林六郎以下宇治役人の監視の中で仕立てた行列は大津宿へ向かいます。大津本陣では再び大阪より到着した山寺甚左衛門が侍13人中間10人を伴って、宇治よりの行列を待ち受けることとなります。

山寺甚左衛門一行は前日の9日朝6時に大阪を

出立し、枚方にて晝食を取り伏見で1泊し、当日早朝伏見街道を経て一気に大津城へ急ぎました。

晝の休息に合わせて到着した宇治からの一行を取り込み、長道中の行列を再編成して寛政6年度の本格的「下りお茶壺道中」となり出発しました。山寺甚左衛門の道中は、10日に大津を出立し当日は守山泊、翌11日には愛知川で休息し醒ヶ井泊、12日は大垣で休息し尾起泊、13日は青洲で休息し鳴海泊、14日は岡崎で休息し御油泊、15日は白須賀で休息し浜松泊となりました。

この行列は翌日、天竜川を船で渡り大井川を越えて島田へ泊まるというハードな工程ですが、この浜松で道中距離が約半分となります。

大井川を渡るには、川札(川越札・油札ともいい、人足1人を雇うために札1枚が必要)を川会所で買い、川越人足に手渡してから、人の肩や連台に乗り川を越しました。川札の値段は、股通48文(約700円)、帯下通52文(約800円)、帯上通68文(約1000円)、乳通78文(約1200円)、脇通94文(約1500円)という変動相場制でありました。また、人足は渡る人に対し1人足では落ちることもとあると話し、川底が浅くても2人分の札を買わされていました。川越人足は金谷側に350人、島田側に350人の計700名近く働いていましたが、儲かる事もあって最高では約1500人程度もいたそうです。

6月16日の島田の本陣は置塩藤四郎宅でした。置塩家は寛永10年1633年から幕末までの長きにわたり本陣を構えた名家です。6月17日島田を出発し、藤枝には瀬戸川を渡り岡部に向かいました。以降、18日には吉原で休息し三島泊、19日には箱根で休息し大磯泊、20日には藤澤で休息し神奈川泊、21日には品川で休息し、いよいよ江戸城に入ることになります。無事江戸城に入場し西の丸にお茶を献上しました。

以上が「お茶壺道中」の概要ですが、この行列は旧岡部町と合併したあとの共同作業としてはこれ以上ないと考え、国民文化祭で紹介することになりました。是非ともみなさんご覧頂きたいと思います。(担当/大塚)